た。とくに，難病による死亡者の頻度・分布の推移をみるために，1968～1978年の11年間，1979～1994年の16年間，1995～1999年の5年間というふうに，ある程度まとまった期間における死亡統計についても報告してきた[2~4]。しかし，難病対策事業が始まってから現在までの約30年を通年して，その推移について疫学的に検討した研究はない。

難病の中にも，一定の基準に基づいた治療法や対症療法が開発されているものもあり[5]，この流れの中で，難病ごとにその死亡者の頻度・分布の推移を確認することは，これまでの難病対策事業の成果を把握するとともに，今後のあらたな対策を展開して行く上で，有用な疫学上の科学的根拠を提供することになると考える。本研究の目的は，1972年に難病対策事業が開始されてから最新の人口動態死亡統計データの入手が可能な2004年までの33年間における難病の死亡数および死亡率とその推移について検討することである。

II 研究方法

1. 対象疾患

人口動態調査死亡票で用いられる死因は国際疾病分類（International Classification of Diseases あるいは International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems，以下 ICD）をもとに分類されている。難病に指定されている特定疾患治療研究対象疾患45疾患（小分類で52疾患）のうち，ICD（ICD-8, ICD-9, ICD-10）の基本分類コードまたは細分類コードによる特定が可能であり内容的にも妥当であった[6]17疾患の中から年間死亡数が100を超す次の7疾患を本研究の解析対象疾患とした（括弧内は順に ICD-8, ICD-9, ICD-10のコードを示す）：再生不良性貧血（284, 284, D61），パーキンソン病（342.0, 332.0, G20），全身性エリテマトーデス（734.1, 710.0, G70.0），潰瘍性大腸炎（563.1, 556, K51），特発性血小板減少性紫斑病（287.1, 287.3, D69.3），結節性動脈周囲炎（446.0, 446.0, M30.0），アミロイドーシス（276, 277.3, E85）。

2. 資料

本研究で用いた資料は，1972年から2004年までの人口動態調査死亡票をもとにコンピューター処理した原テープのデータから氏名・住所などの個人を同定できる情報を除き転写した電子媒体データであり，指定統計の目的外使用の承認を得たものである（統発第1215010号 平成17年12月15日）。対象とした7疾患の総死亡件数120,854から性・年齢不詳および死亡場所不明の9件を除外した120,845を本研究の解析に用いた。なお，人口動態調査死亡票で採用されている死因は原死因である。

3. 解析方法

1) 死亡数，粗死亡率，年齢調整死亡率

本研究の解析対象とした難病について，1972～2004年の各年における死亡数，粗死亡率および年齢調整死亡率（直接法）を次の計算式にて算出した。各計算式は，死亡数＝年間の死亡数，粗死亡率＝(年間の死亡数/各年の人口)×1,000,000，年齢調整死亡率＝{(年間の年齢階級別死亡率×基準人口の年齢階級別人口)の総和}/基準人口の総和である。

各年の人口は，1975年，1980年，1985年，1990年，1995年，2000年，2005年は国勢調査人口，中間年は線形補完して算出した各年の人口である。なお，各年の人口とは10月1日現在のものである。基準人口には昭和60年（1985年）モデル人口を用いた。解析には SAS Version 9.1を用いた。

2) 死亡率の時系列推移の検定

本研究では，1972～2004年間における難病による死亡率の時系列推移をみるために，年齢調整死亡率をもとにジョインポイント回帰モデルを用いたトレンド検定を行った[7]。本研究で取り扱うような長期間にわたる時系列データの場合，その変化（年齢調整死亡率の増減）は，必ずしも一直線的なものとは限らず，いくつかの変化点の存在する可能性が考えられる。解析をする時点では，この変化点があるのかないのか，あるとしたら，どの時点にいくつの変化点があるのかが判らない。ジョインポイント回帰分析のアルゴリズムでは，変化点の個数が K_A（初期値＝0）個の場合に比べて K_B（初期値＝3）個の場合の方が有意（$P<0.05$）にモデルの当てはまりが良ければ K_A を1増し，そうでなければ K_B を1減じ，これを $K_A=K_B$ となるまで繰り返す。両者が一致したときを最適の変化点の個数とする。最大の変化点の個数は3個であるが，これは事前の視覚的検討により3個（区間は4つ）で十分と考えたためである。

また，変化点の場所は，K_A または K_B 個の変化点の全ての組み合わせのうちで最もモデルの当てはまりがよいものを探索する。そして変化点間の時系列相の年変化率（95％信頼区間）を算出する。ここでいう年変化率とは，たとえば，−3％/年の場合，10年間で $(1-0.03)^{10}=0.74$ 倍（−26％）となることを意味する。解析には，米国 National Cancer Institute の Surveillance, Epidemiology, and End Results Program によって開発された SEER *Stat Software を用いた（http://www.seer.cancer.gov）。

なお，参考値として，厚生労働省が公表している人口動態統計に基づく男女別の総死亡年齢調整死亡率（http://wwwdbtk.mhlw.go.jp/toukei/index.html）から，1972〜2004年間における年変化率を算出した。

Ⅲ 結　　果

1972〜2004年における難病の年間死亡数を示す（図1）。最新（2004年）の年間死亡数（人/年）は，パーキンソン病3,275（男1,586，女1,689），再生不良性貧血787（男336，女451），アミロイドーシス336（男182，女154），全身性エリテマトーデス282（男54，女228），特発性血小板減少性紫斑病188（男83，女105），結節性動脈周囲炎187（男87，女100），潰瘍性大腸炎111（男63，女48）であった。とくにパーキンソン病による年間死亡数の増加が顕著であった。再生不良性貧血は，1974年まで増加した後減少に転じ1977年以降は横ばい状態となった。他の5疾患は年間死亡数が500人未満で，比較的小さな増減が見られた。

1972〜2004年における難病の粗死亡率と年齢調整死亡率を図示する（図2-1〜図2-7）。

2004年の粗死亡率（人口100万対）をみると，再生不良性貧血は男5.41，女6.92，パーキンソン病は男25.55，女25.93，全身性エリテマトーデスは男0.87，女3.50，潰瘍性大腸炎は男1.02，女0.74，特発性血小板減少性紫斑病は男1.34，女1.61，結節性動脈周囲炎は男1.40，女1.54，アミロイドーシスは男2.93，女2.36であった。

1972〜2004年における難病の死亡率の推移をみると，各難病の年齢調整死亡率のうち，減少傾向のみられた疾患は再生不良性貧血，全身性エリテマトーデス，潰瘍性大腸炎と特発性血小板減少性紫斑病，増加傾向がみられた疾患は結節性動脈周囲炎とアミロイドーシスであった。パーキンソン病は1980年頃まで増加した後は横ばい状態であった。

1972〜2004年における難病の死亡率の推移についてジョインポイント回帰分析による統計学的解析から得られた結果を示す（表1）。全期間を通年して年変化率みると，死亡率の減少がみられた

図1　難病の死亡数の推移1972-2004年

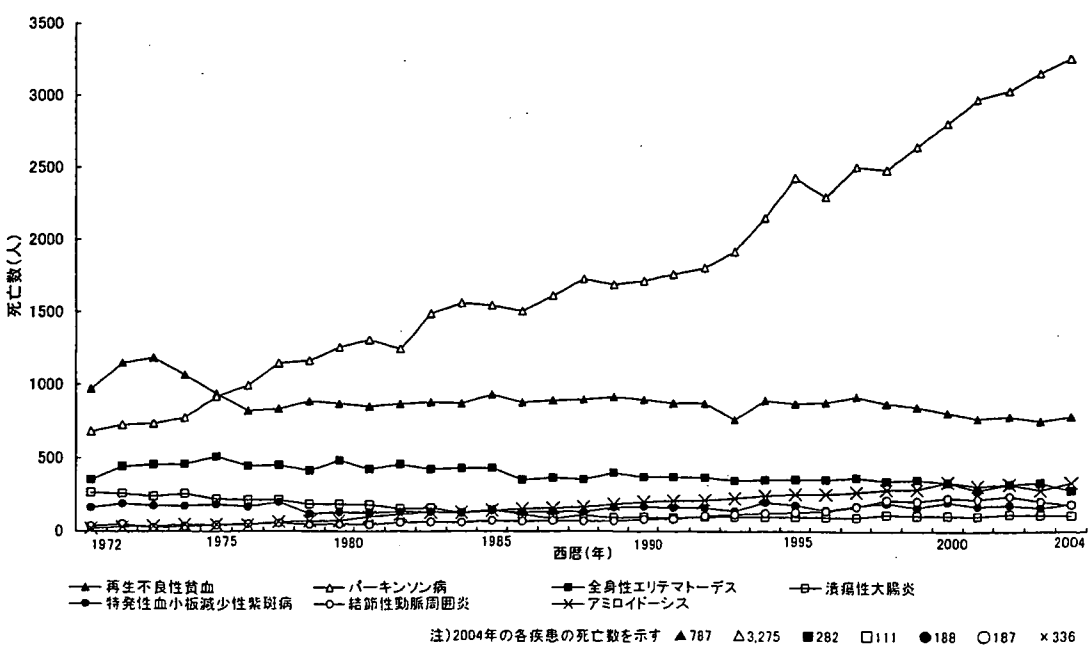


図2-1　再生不良性貧血の粗死亡率と年齢調整死亡率

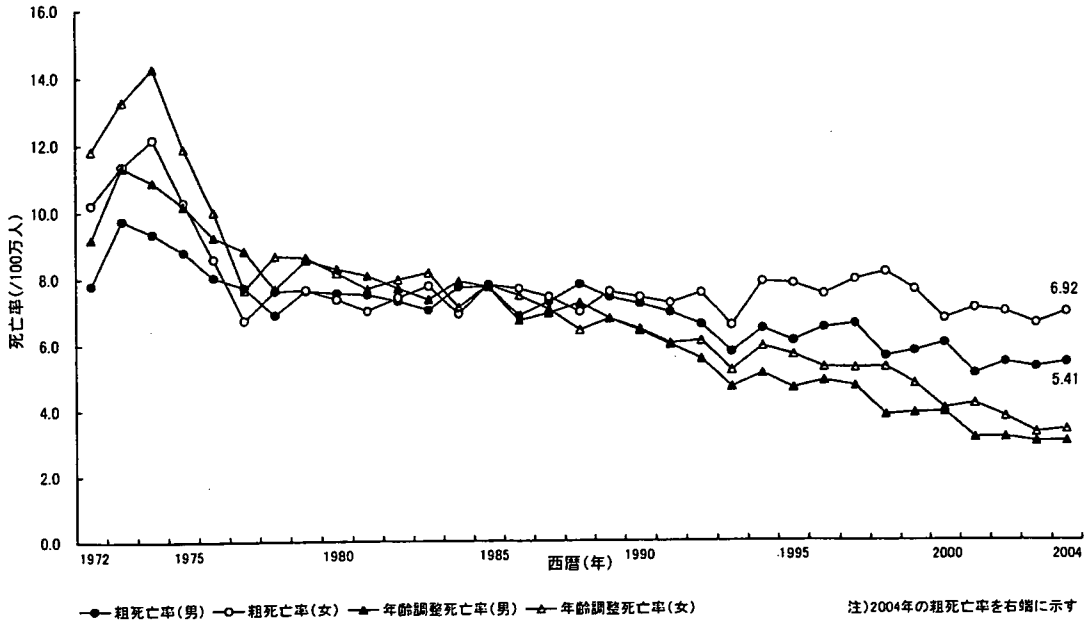
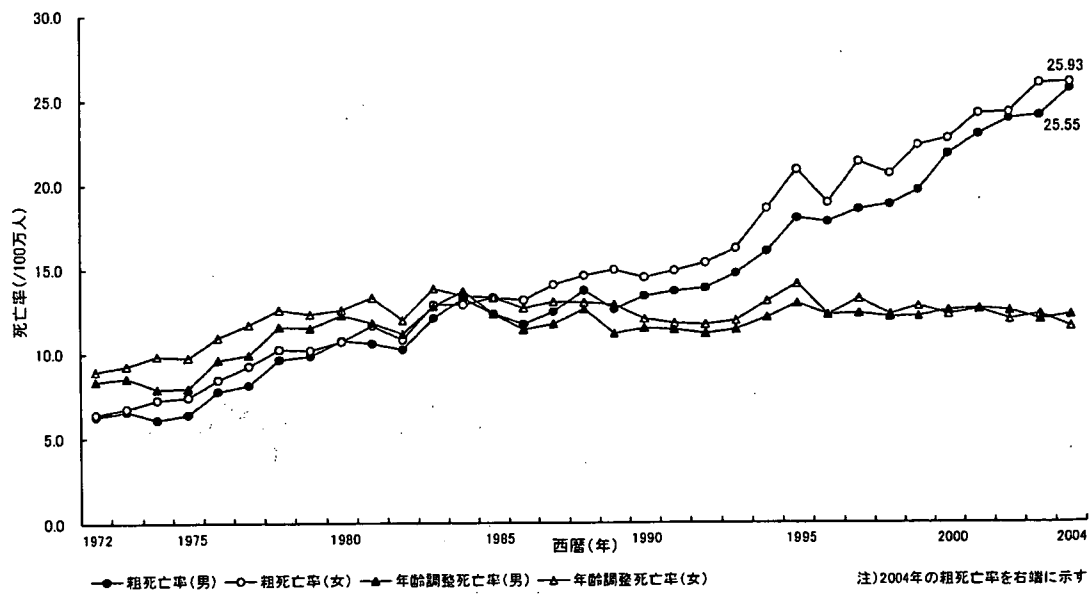


図2-2　パーキンソン病の粗死亡率と年齢調整死亡率



のは，再生不良性貧血（男－3.8%，女－3.7%），全身性エリテマトーデス（男－0.9%，女－2.6%），潰瘍性大腸炎（男－5.2%，女－7.5%）と特発性血小板減少性紫斑病（男－2.1%，女－3.0%），増加がみられたのは，パーキンソン病（男のみ＋0.7%），結節性動脈周囲炎（男＋3.2%，女＋4.0%）とアミロイドーシス（男＋3.3%，女＋3.5%）であった。なお，この期間に相当する総死亡の年齢調整死亡率の年変化率は，男－1.9%，女－2.9%であった。

このうち，全身性エリテマトーデス（男のみ）と特発性血小板減少性紫斑病（男女ともに）だけが全期間にわたり直線的に漸減していたが，他の疾患は，複数の変化点の間において年変化率に統計学的有意差がみられた。たとえば，再生不良性貧血では，男性では1972～1989年で減少（－2.7%），女性では1974～1977年で激減し（－15.0%），1977～1988年で減少率が鈍り（－2.4%），1988～2004年で減少率が再び大きくなっていた（男－5.2%，女－7.7%）。パーキン

図2-3　全身性エリテマトーデスの粗死亡率と年齢調整死亡率

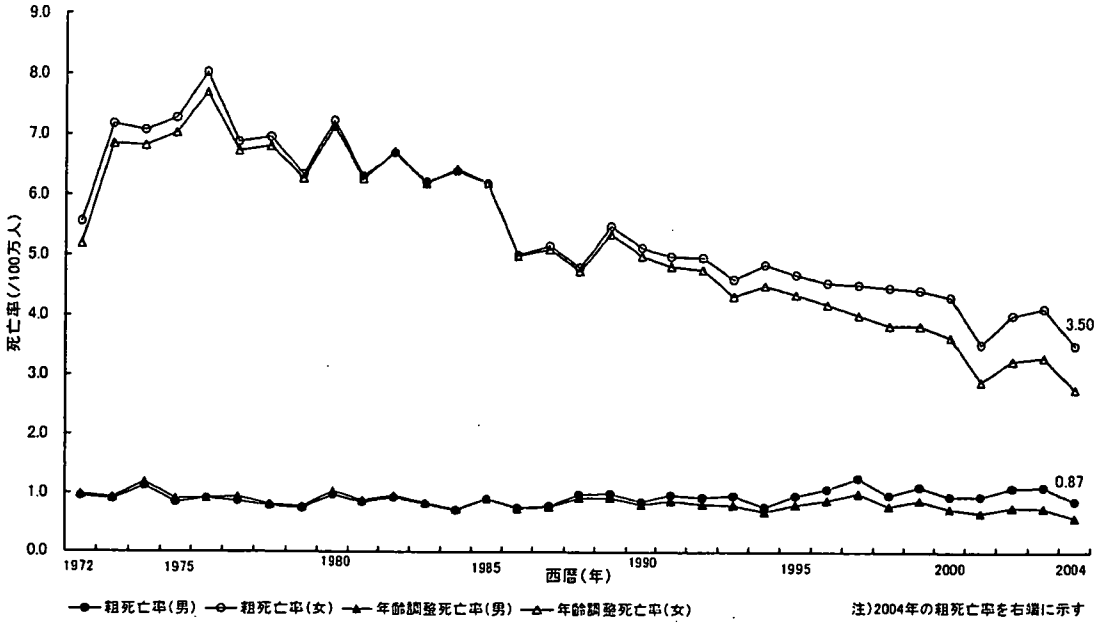
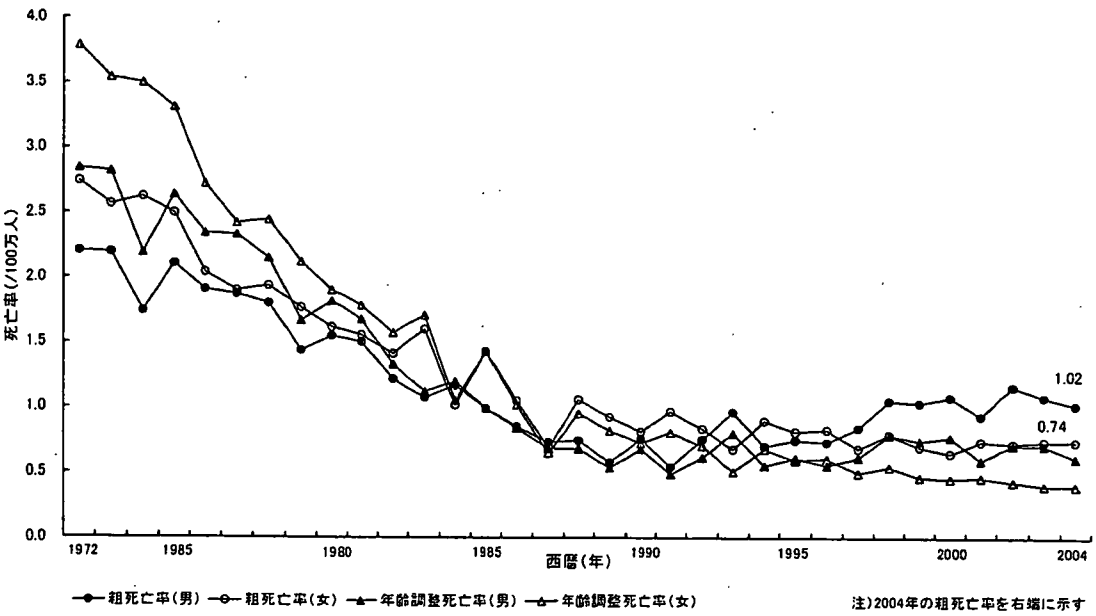


図2-4　潰瘍性大腸炎の粗死亡率と年齢調整死亡率



ソン病は，男では1972～1980年に激増した（+5.6%）後は横ばい状態（+0.1%），一方，女は増減を繰り返し，最近10年間は僅かだが減少を続けている（−1.4%）。全身性エリテマトーデス（女）では，1972～1976年に激増し（+7.0%），以降は，男以上に大きな減少率が続いている（−3.1%）。潰瘍性大腸炎については，男は1972～1978年に減少（−4.3%），1978～1989年に激減した（−10.9%）が，1989～2004年の間は減少傾向が止まっている。他方，女は減少が続いている（1972～1990年 −9.0%，1990～2004年 −4.6%）。結節性動脈周囲炎については，男では1989～2000年に激増（+7.3%）したが，最近5年間は増加傾向が止まっている。女では，時期は異なるものの激増した（1995～2001年 +9.3%）後，激減している（2001～2004年 −15.1%）。アミロイドーシスは，男では1972～1986年に激増した（+9.3%）後，漸増が続いている（1986～2004年 +1.2%）。同様に女も1972～1982年に激増した（+18.0%）後も増加が続いていたが（+2.8%），

図2-5　特発性血小板減少性紫斑病の粗死亡率と年齢調整死亡率

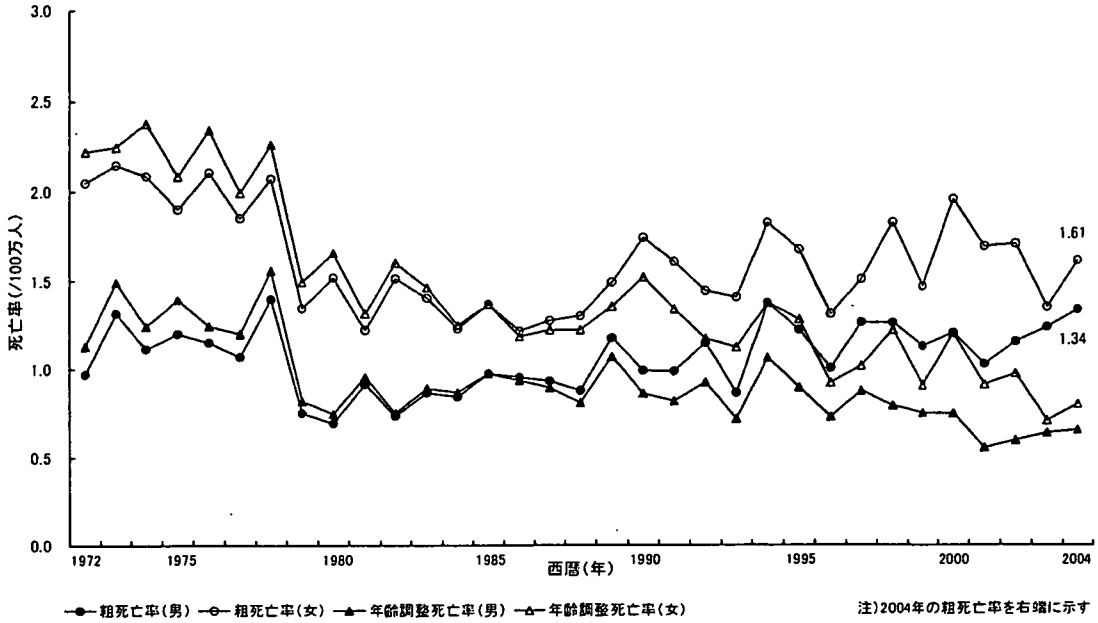
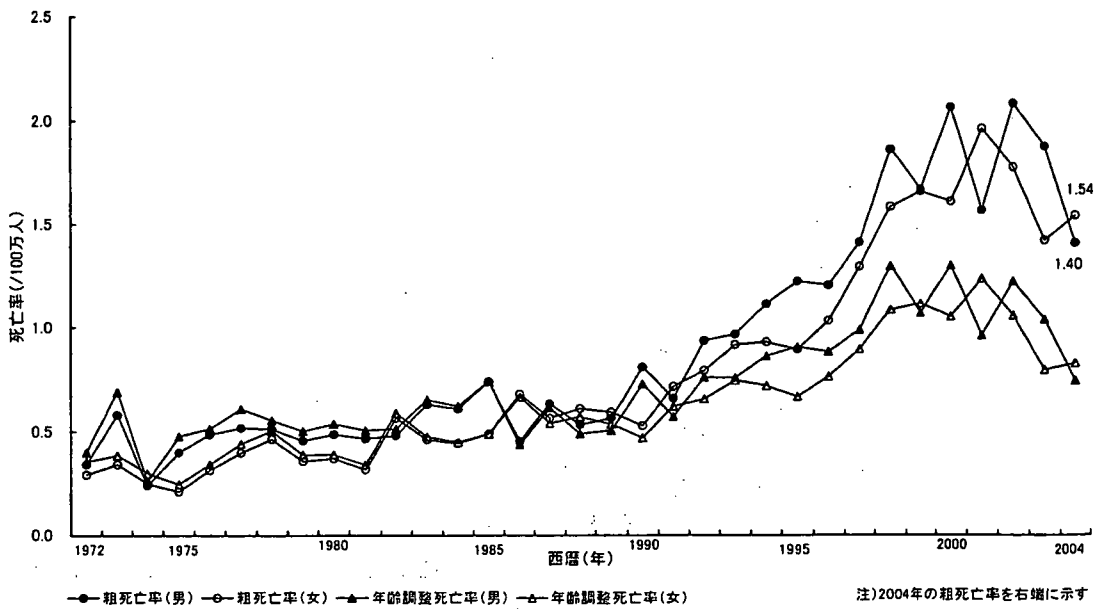


図2-6　結節性動脈周囲炎の粗死亡率と年齢調整死亡率



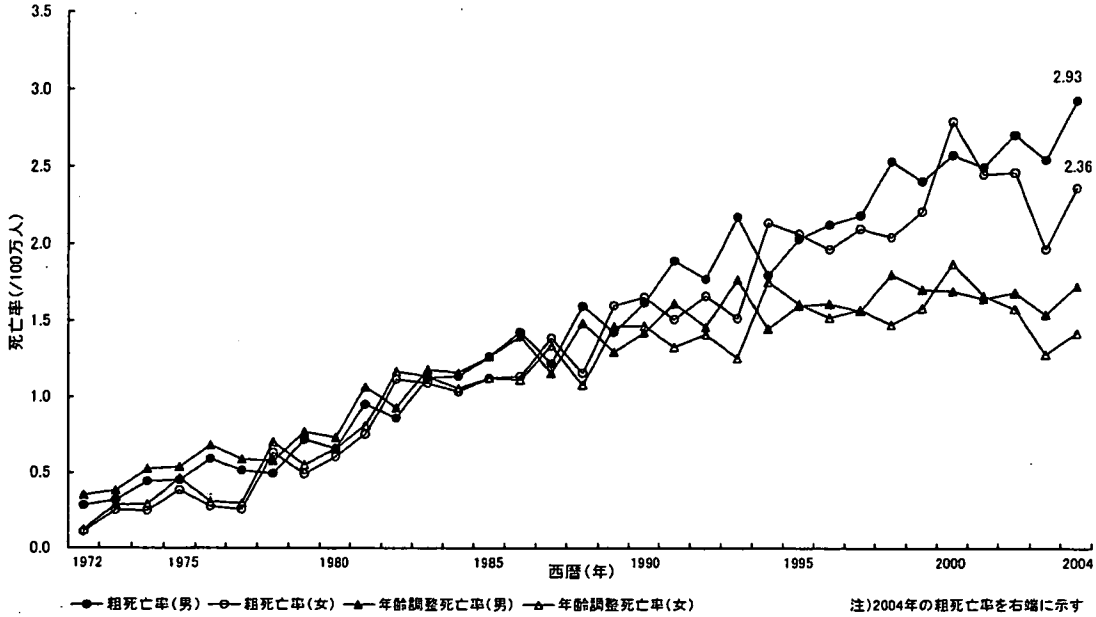
最近5年間は増加傾向が止まっている。

Ⅳ　考　　察

1972年に難病対策事業が開始されてから2004年までの33年間にわたる難病（再生不良性貧血，パーキンソン病，全身性エリテマトーデス，潰瘍性大腸炎，特発性血小板減少性紫斑病，結節性動脈周囲炎，アミロイドーシス）の死亡数および死亡率とその推移について解析を行った。得られた解析結果について検討する前に，まず，ICDコードの死亡統計へ及ぼす影響について述べておきたいと思う。

国際疾病分類のICD-9からICD-10への変更に伴い，1995年1月，死亡診断書の改正が施行され，終末期の心不全や呼吸不全といった状態を死亡診断名として記載しないよう周知徹底が図られ，その結果，1995年の死亡統計では，心疾患死亡数が1993年のものと比べ23％減少し，心不全死

図2-7　アミロイドーシスの粗死亡率と年齢調整死亡率



亡数は67%激減したことがある[8]。これは死亡統計へICDコードの変更に伴う人工的な影響が及んだ典型例である[9]。本研究の対象期間である1972～2004年までの間に，2回の国際疾病分類の変更が行われ，我が国では1979年からICD-9，1995年からICD-10が採用された。そこで，1979年と1995年の両年の前後で，死亡統計に変化がみられたかどうか検討しておく必要がある。図1に示されるように，1979年前後ではいずれの疾患も死亡数に大きな変化はみられなかった。1995年前後ではパーキンソン病でのみ1995年の2,435件から1996年の2,302件と一時的な減少（5.5%）がみられたが，1997年以降は再び増加傾向に転じた。この一時的な減少がICDコードの変更に伴う人工的な影響であったか否か本研究で確認することはできなかったが，仮にあったとしても，前述した心疾患の場合に比べ，その影響は小さかったと考えて良いと思われる。なお，ICDコードとして採用されている死因は原死因であるため，注目する疾患が基礎疾患としてあったとしても，最終的に別の疾患で亡くなった場合には原死因として挙がってこない。

次に，得られた解析結果について検討する。解析の対象とした7疾患を，2004年の時点で死亡数および粗死亡率の高い順にランクすると，パーキンソン病，再生不良性貧血，アミロイドーシス，全身性エリテマトーデス，特発性血小板減少性紫斑病，結節性動脈周囲炎，潰瘍性大腸炎となった。年齢調整をして死亡率の全期間（1972～2004年）の年変化率をみると（表1），再生不良性貧血，全身性エリテマトーデス，特発性血小板減少性紫斑病，潰瘍性大腸炎の4疾患では減少傾向，パーキンソン病，結節性動脈周囲炎，アミロイドーシスの3疾患では増加傾向が見られた。この期間に相当する総死亡の年齢調整死亡率の年変化率と比較すると，特発性血小板減少性紫斑病（男女とも）および全身性エリテマトーデス（男のみ）ではほぼ同程度の減少，再生不良性貧血（男女とも）および潰瘍性大腸炎（男女とも）では，減少の程度がより大きかった。

死亡というエンドポイントに着眼すると，原因不明で難治性とされる難病の中にも，本研究で解析した疾患のように，この約30年間で大きな改善のあったことを確認することができた。本研究の対象疾患である難病の多くは，病因や誘因・危険要因が不明で固有の効果的な一次予防の手立てがなく，死亡率の改善には，適切な診断治療の関与の可能性が大きいと考えられる[5,10,11]。その例として，再生不良性貧血重症例に対する骨髄移植[12,13]（HLA一致血縁ドナーでの10年生存率は72.5%，非血縁ドナーでの5年生存確率（95%信頼区間）は56（34-78）%），特発性血小板減少性紫斑病に対する摘脾[14]（60-90%が寛解）および厳重な出血管理（致死的出血症状は数%），全身

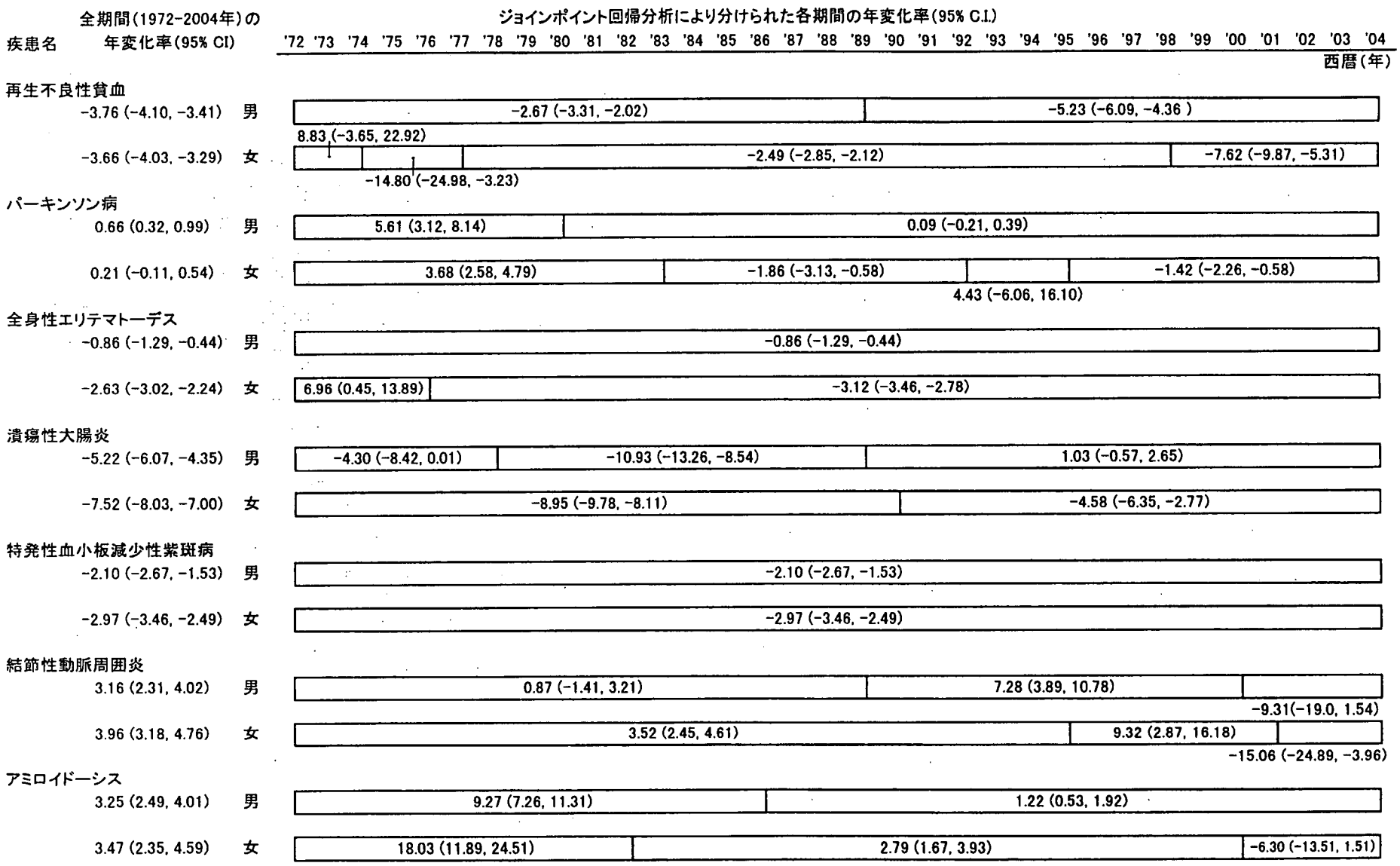


図3　難病の年齢調整死亡率の時系列推移

注）口内の数字は各期間の年変化率(95%C.I.)、縦線は変化点の時期を示す。

性エリテマトーデスに対するパルスを含むステロイド療法[15]（10年生存率は90%以上）や合併する腎不全に対する血液透析，潰瘍性大腸炎に対するステロイド・免疫抑制療法および血球成分除去療法[16]などが挙げられる（寛解維持）。

他方，僅かではあるが，依然として死亡の減少がみられなかった疾患（アミロイドーシス），増加したあと横ばい状態が続いている疾患（パーキンソン病），激減したあと減少傾向が止まった状態の疾患（潰瘍性大腸炎）のあった事は留意すべき点である。たとえば，アミロイドーシスについては，家族性アミロイドーシスに対する根治療法としての肝移植[17]以外に，他の病型のアミロイドーシスに対しては有効な治療法がなく，予後は進行性で不良である[10]。発病・病因の解明や診断・治療方法の開発など，難病対策事業として，さらに積極的に取り組むべき疾患の1つと思われる。潰瘍性大腸炎については，前述したように，ほとんどの例で長期寛解維持が可能となったが，10年以上の経過を有する全大腸炎を母地に大腸癌が発生し，わが国でも年々報告例が増加している[18]。潰瘍性大腸炎合併癌は，多発癌・未分化癌の頻度が高く，粘膜の炎症性変化のため診断が困難であり，進行性の癌となり予後が悪い。厚生労働省難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班で，現在，潰瘍性大腸炎長期経過例へのサーベイランスプログラムの確立-狙撃生検を中心としたサーベイランスシステムによる早期発見に関する研究が進行中である。パーキンソン病については，レボドパ治療の導入以来一般人口と同等の生命予後まで改善されてきている[11]にも拘らず死亡率が減少しないのは，疾患に対する認識が高まり診断がつけられやすくなったことも考えられるが，真に罹患が増えている可能性も考慮に入れておく必要がある。パーキンソン病に関する予防因子あるいは危険因子に関する疫学研究によれば[19]，前者にはタバコ，カフェイン，非ステロイド系消炎鎮痛剤，後者には脂肪性食物・乳製品，高カロリー，頭部外傷，農薬などが示唆されている。因果関係が確立されているわけではないが，欧米でパーキンソン病の有病率が高いことと合わせ[20]，食生活を含むライフスタイルの西洋化などの非遺伝的要因の関与の可能性も考えられ，今後の研究課題の1つと思われる。

最後に，これらの検討結果を踏まえ，事業としての難病対策について言及したいと思う。第1に特筆すべき点は，疾患の多くで死亡の減少がみられたことである。難治性であっても患者数が少ないと，一般的には対策の優先度が低くなりがちであるが，難病という大きな括りの中で，研究の推進と安心して治療に専念できる医療環境の提供が長年にわたり継続して行われてきた。難病による死亡の減少は，この難病対策事業による大きな成果と言えよう。しかしながら，難病の生命予後の改善は，根治療法によるものではないため，有病期間の延長と長期治療の必要性をも意味している。本質的な病因の究明・治療方法の開発が待ち望まれるわけであるが，現実的には，現行の治療方法の中で，より副作用や侵襲が少なく寛解期間の長い治療方法の開発に期待が持たれる。そして，難病を有していても適切に加療することで自立した社会生活や家庭生活の実現は可能であり，そのための支援は，今後も必要であると考える。加えて，発病や病状進行の予防という観点から，予防因子あるいは危険因子に関する疫学研究を継続して行い，効果的な生活指導方法を開発することも重要であると考える。

本研究は，平成18年度厚生労働科学研究・難治性疾患克服研究事業「特定疾患の疫学に関する研究」（主任研究者　永井正規）の分担研究として行なったものである。

（受付　2006.12.13）
（採用　2007. 8.20）

文　献

1） 大野良之，田中平三，中谷比呂樹，他．難病の最新情報—疫学から臨床・ケアまで．東京：南山堂，2000.
2） 厚生省特定疾患難病の疫学調査研究班（班長 青木國雄）．難病死亡統計 性・年齢階級別都道府県分布．簑輪眞澄，編．1984; 1-229.
3） 厚生省特定疾患調査研究事業 特定疾患に関する疫学研究班（班長 大野良之）．難病の記述疫学—既存資料による比較を中心に—．稲葉　裕，大野良之，編．1997; 1-239.
4） 厚生科学研究特定疾患対策研究事業 特定疾患の疫学に関する研究班（主任研究者 稲葉裕）．平成13年度研究業績集．2002; 1-348.
5） 厚生労働科学研究難治性疾患克服研究事業 特定疾患の疫学に関する研究班（主任研究者 稲葉裕）．

難病30年の研究成果—難病の研究成果に関する調査報告書．永井正規，柴崎智美，稲葉　裕，編．厚生労働省健康局疾病対策課，監修．2004; 1-175.

6) 土井由利子，横山徹爾，川南勝彦，他．特定疾患治療研究対象疾患と国際疾病分類（ICD-10, 9, 8）に基づく死因コードの対応．日本公衛誌 2006; 53: 777-786.

7) Kim HJ, Fay MP, Feuer EJ, Midthune DN. Permutation tests for joinpoint regression with applications to cancer rates. Stat Med 2000; 19: 335-351.

8) 厚生省大臣官房統計情報部．第5章 死亡〔主な死因〕心疾患．平成7年人口動態統計上巻．東京：厚生省大臣官房統計情報部，1997; 288-291.

9) 斉藤功，小澤秀樹，青野裕士，他．死亡診断書の改正にともなった大分市の心疾患死亡数の変化について．日本公衛誌 1997; 44: 874-879.

10) 疾病対策研究会．難病の診断と治療指針第3版第1巻．東京：東京六法出版，2005.

11) 杉本恒明，小俣政男，水野美邦（編．内科学 第8版．東京：朝倉書店，2003.

12) Imamura M, Asano S, Harada M, et al. Current status of hematopoietic cell transplantation for adult patients with hematologic diseases and solid tumors in Japan. Int J Hematol 2006; 83: 164-178.

13) Kojima S, Matsuyama T, Kato S, et al. Outcome of 154 patients with severe aplastic anemia who received transplants from unrelated donors: the Japan Marrow Donor Program. Blood 2002; 100: 799-803.

14) Ojima H, Kato T, Araki K, et al. Factors predicting long-term responses to splenectomy in patients with idiopathic thrombocytopenic purpura. World J Surg 2006; 30: 553-559.

15) Kataoka H, Koike T. Lupus mortality in Japan. Autoimmun Rev 2004; 3: 421-422.

16) Yamamoto T, Umegae S, Matsumoto K. Safety and clinical efficacy of granulocyte and monocyte adsorptive apheresis therapy for ulcerative colitis. World J Gastroenterol 2006; 12: 520-525.

17) Takei Y, Ikeda S, Ikegami T, et al; Japanese Liver Transplantation Society. Ten years of experience with liver transplantation for familial amyloid polyneuropathy in Japan: outcomes of living donor liver transplantations. Intern Med 2005; 44: 1151-1156.

18) 川　浩介，樋田信幸，應田義雄，他．癌化とそのスクリーニング．日本臨床 2005; 63: 809-814.

19) Chade AR, Kasten M, Tanner CM. Nongenetic causes of Parkinson's disease. J Neural Transm Suppl 2006; 70: 147-151.

20) Zhang ZX, Roman GC. Worldwide occurrence of Parkinson's disease: an updated review. Neuroepidemiology 1993; 12: 195-208.

Trends in mortality from intractable diseases in Japan, 1972–2004

Yuriko DOI*, Tetsuji YOKOYAMA[2*] and Miyoshi SAKAI[2*]

Key words : Intractable disease, death rate, joinpoint regression analysis, aplastic anemia, Parkinson's disease, systemic lupus erythematosus, ulcerative colitis, idiopathic thrombocytopenic purpura, polyarteritis nodosa, amyloidosis

Purpose In 1972, the Ministry of Health, Labour and Welfare of Japan defined intractable diseases as those with unknown etiology, no established treatment regimens, and severe sequelae of physical, mental and social difficulties. Since then, the Ministry has promoted scientific research on these diseases and offered financial support to those suffering from their effects. The purpose of the present study was to analyze trends in deaths from the diseases in Japan over the period from 1972–2004.

Methods For the selected intractable diseases with 100 deaths or more per year, crude (CDR) and direct age-standardized death rates (ADR) were computed using the national underlying-cause-of-death mortality database of Japan based on International Classification of Diseases. Joinpoint regression analysis was applied to identify significant changes in the trends.

Results The CDRs in the latest observed year per 1million persons/year) for males and females were 25.55 and 25.93, respectively, for Parkinson's disease, 5.41 and 6.92 for aplastic anemia, 0.87 and 3.50 for systemic lupus erythematosus, 2.93 and 2.36 for amyloidosis, 1.40 and 1.54 for polyarteritis nodosa, 1.34 and 1.61 for idiopathic thrombocytopenic purpura, and 1.02 and 0.74 for ulcerative colitis. The respective annual percentage changes (APCs) for males and females during the overall period decreased for ulcerative colitis (−5.2% and −7.5%), aplastic anemia (−3.6% and −3.7%), idiopathic thrombocytopenic purpura (−2.1% and −3.0%), and systemic lupus erythematosus (−0.9% and −2.6%), while the APCs increased for amyloidosis (+3.3% and +3.5%), polyarteritis nodosa (+3.2% and +4.0%), and Parkinson's disease (+0.7% in males alone). With the APCs in the latest trend phase, polyarteritis nodosa and Parkinson's disease in females showed appreciable declines; on the other hand, amyloidosis in males demonstrated the significant increase, and ulcerative colitis in males exhibited an apparent leveling off of the decline.

Conclusion The ADRs for most of the intractable diseases have declined significantly in Japan over the last 3 decades. The decline might be attributed in large part to improved diagnosis and treatment because of the lack of effective primary prevention measures. Support for the affected patients and further research on etiology and radical cure of the diseases must be considered necessary.

* Department of Education, Training Technology and Development, National Institute of Public Health

2* Department of Technology Assessment and Biostatistics, National Institute of Public Health

Amyotrophic Lateral Sclerosis. 2007; 8: 300–304

informa
healthcare

ORIGINAL ARTICLE

Nutritional status and risk of amyotrophic lateral sclerosis in Japan

KAZUSHI OKAMOTO[1], TAMEKO KIHIRA[2], TOMOYOSHI KONDO[2], GEN KOBASHI[3], MASAKAZU WASHIO[4], SATOSHI SASAKI[5], TETSUJI YOKOYAMA[6], YOSHIHIRO MIYAKE[7], NAOMASA SAKAMOTO[8], YUTAKA INABA[9] & MASAKI NAGAI[10]

[1]*Department of Public Health, Aichi Prefectural College of Nursing and Health,* [2]*Department of Neurology, Wakayama Medical University,* [3]*National Institute of Radiological Sciences,* [4]*Department of Public Health, St Mary's College,* [5]*Project of Scientific Evaluation of Dietary Reference Intakes, National Institute of Health and Nutrition,* [6]*Department of Technology Assessment and Biostatistics, National Institute of Public Health,* [7]*Department of Public Health, Fukuoka University School of Medicine,* [8]*Department of Hygiene, Hyogo College of Medicine,* [9]*Department of Epidemiology, Juntendo University School of Medicine, and* [10]*Department of Public Health, Saitama Medical School, Japan*

Abstract

Only a few human studies have reported the relationship between dietary factors and the risk of amyotrophic lateral sclerosis (ALS). We therefore analyzed the relationship between macronutrients (carbohydrate, protein and fat) and the risk of ALS using a case-control study in Japan. The study comprised 153 ALS patients diagnosed by the El Escorial World Federation of Neurology criteria, and 306 gender- and age- matched controls randomly selected from the general population. A self-administered food frequency questionnaire was used to estimate pre-illness intakes of food groups and nutrients. The strength of association between ALS and a potential risk factor was assessed by calculating odds ratios (ORs) and 95% confidence intervals (CIs). A high intake of carbohydrate was significantly associated with an increased risk of ALS (adjusted OR=2.14, 95% CI 1.05–4.36; the highest versus the lowest tertile). ORs for the second and third tertile of total fat were 0.57 and 0.41 (95% CI 0.21–0.80), respectively. ORs for the highest tertile of intake versus the lowest were 0.41 (95% CI 0.21–0.80) for total fat, 0.30 (95% CI 0.16–0.5) for saturated fatty acids (SFAs), 0.35 (95% CI 0.18–0.69) for monounsaturated fatty acids (MUFAs) and 0.58 (95%CI 0.40–0.96) for polyunsaturated fatty acids (PUFAs). Our findings suggest that high intakes of carbohydrate and low intakes of fat and some kinds of fatty acids may, when combined, increased the risk of ALS.

Key words: *Amyotrophic lateral sclerosis, case-control study, diet, macronutrients*

Introduction

With the rapidly Westernized dietary habits and sedentary lifestyles over the past several decades in Japan, the number of amyotrophic lateral sclerosis (ALS) patients has increased (1). Several epidemiological studies have examined the risk factors of ALS; most have focused on physical activity (2–4), skeletal fractures (5) and heavy metal exposure at work (6–8). Recently, a few such epidemiological studies have examined the relationship between dietary factors and the risk of ALS; most have focused on intake of calcium and magnesium (9–10) and dietary antioxidants, particularly vitamin E (11). However, those findings failed both qualitatively and quantitatively to provide any evidence on dietary factors, because so very little is known about the relationship between those factors and the risk of ALS. To the best of our knowledge, no study has yet examined the relation of macronutrients (carbohydrate, fat, and protein) to ALS. Thus, using a food frequency questionnaire (FFQ), we focused on the pre-illness dietary risk factors for ALS and assessed them in a case-control study in a Japanese population.

Methods

Subjects and methods

Study populations. Case subjects were all definite or probable ALS patients aged 18 to 81 years who had been diagnosed based on the El Escorial World Federation of Neurology criteria (13) in medical centers in the Tokai area of Japan from 1 January 2000 to 31 December 2004.

Correspondence: K. Okamoto, Aichi Prefectural College of Nursing and Health, Togoku, Kamishidami, Moriyama-ku, Nagoya 463-8502, Japan. Fax: 81 52 736 1415. E-mail: okamoto@aichi-nurs.ac.jp

(Received 9 March 2007; accepted 15 May 2007)

ISSN 1748-2968 print/ISSN 1471-180X online
DOI: 10.1080/17482960701472249

ALS was definite in 65% and probable in 35% of cases. All cases of progressive bulbar palsy (PBP) were included in this study, whereas familial progressive muscular atrophy was excluded. There was no evidence of coexisting Parkinson's disease or related disorders including multisystem atrophy.

We set up two community controls matched to each patient for age (±2 years), gender and residence based on electoral districts. They were randomly selected from among the general population in the same district as our case subjects based on the basic register of residents. Selection was carried out by a proportional simple random sampling, with stratification by gender and age groups, using the basic resident registry.

Data collection. We asked patients to recall their lifestyle during the three years before the onset of ALS, and community controls the same before their interview. When patients were unable to provide any information on their lifestyle and exposures because of their seriously impaired conditions or early death, proxies (mainly spouses) were interviewed. Standardized in-person interviews were conducted for patients and for their individually matched control. Only when this was not possible was a proxy interview performed. To minimize information bias, when a case's proxy to a case was interviewed, the control's proxy to the control was also interviewed even if the control was competent to be interviewed.

The institutional ethics committee of the Aichi Prefectural College of Nursing and Health approved the protocol before commencement of the study. All participants provided informed consent to a verbal explanation of the study protocol including next of kin for case subjects who were severely ill, unconscious, or dead as well as proxy respondents for control subjects.

Dietary information. Dietary information was obtained by a self-administered food frequency questionnaire (FFQ), consisting of 97 commonly eaten food and beverage items. This FFQ was validated for food groups by referring to four 4-day dietary records (DRs) among 88 men and women in central Japan, from 1996 to 1997 (14–15). The energy-gender-and age-adjusted test-retest correlation coefficients between the two FFQs administered at a one-year interval ranged from 0.34 to 0.78. The de-attenuated, energy-, gender- and age-adjusted correlation coefficients between the second FFQ and the DRs were larger than 0.40 for most food groups. Estimates of nutrient intake were computed using the Standard Tables of Food Composition in Japan, Fifth revised and enlarged edition (Science and Technology Agency, 2000).

Covariates such as demographic characteristics (age at diagnosis, gender) and risk factors were collected based on the responses to a structured questionnaire specifically designed for this case-control study. A behavior pattern was measured by a 10-item scale designed for a Japanese cohort by Maeda (16). Subjects who scored between 0 and 16 were considered to exhibit a non-type A pattern, which indicated a relaxed and easy-going individual, while those who scored 17 or greater were considered as type A, which denotes a set of characteristics that includes people who are excessively time-conscious, insecure in their status, highly competitive, hostile and aggressive, and incapable of relaxation (17). Smoking status was ascertained in relation to the number of cigarettes smoked per day during the year before the survey (onset of ALS/interview), and subjects were categorized into current smokers (at least one cigarette per day), ex-smokers (smokeless for at least one year before the survey), and never smokers, and was further classified into current smokers and non-smokers (including ex-smokers and never smokers). Body mass index (BMI) was calculated as a subject's weight (kg) divided by height (m) squared as a measure of obesity.

Statistical analysis

The differences in mean values or frequencies between ALS patients and controls were statistically examined by unpaired *t*-test, χ^2 test, or Mantel-extension test. The odds ratio (OR) and its 95% confidence interval (CI) were estimated using multiple conditional logistic regression models to access the strength of association between ALS and potential risk factors (18). Tests for trends in logistic regression analysis were performed by the exposure variable and treating the scored variables as a continuous one.

In the analysis of estimated nutrient intakes, all the nutritional variables were natural logarithmically transformed to improve their normality. Because the intake of most nutrients is strongly correlated with total energy intake, the former was adjusted for the latter using the residuals from linear regression models. For this analysis, subjects were divided into three groups according to the tertile of energy-adjusted nutrient intakes among controls.

The latency period for ALS may be longer than a few years. To address the possibility that changes in lifestyle due to the progression of ALS might have affected the results, we asked subjects whether they had altered their lifestyle, including dietary habits, from three years before the onset of ALS to the date of the study. We also excluded participants with a change in lifestyle, extreme daily energy intakes (<800 or >4000 Kcal for men and <500 or >3500 for women) or incomplete FFQ.

Results

A total of 194 consecutive patients with ALS were identified from the study hospitals. Among them, 31

Table I. Selected background characteristics of study subjects.

	Cases (n=153)	Control (n=306)	
	% or mean	% or mean	p-value
Sex			
Men	60.3	60.3	
Women	39.7	39.7	
Age group			
−49	32.6	33.3	
50–59	36.4	34.8	
60+	31.0	31.9	
Mean age (SD)	63.7±9.2	63.4±10.6	0.05
BMI	22.2±0.2	23.3±0.3	<0.05
Type A behavior pattern	44.2	19.6	0.000
Energy intake (Kcal/day)			
<1554	32.7	24.8	
1554–1987	20.5	24.8	
1987–2418	21.6	24.8	
>2418	25.1	25.8	

were excluded because they met the above exclusion criteria, resulting in 153 ALS patients available for the present analysis. Table I shows the characteristics of cases and controls. The mean ages were around 63.0 years, accounting for about 60% of the men among ALS patients and community controls. The proportion of proxy interviews was similar between ALS patients and controls.

Table II summarizes the ORs for ALS by daily nutrient intake. Carbohydrate intake was positively associated with the risk of ALS. ORs of the former from the second to the highest tertile were 1.51 and 2.14 (95% CI 1.05–4.36; trend p=0.04), respectively. The risk of ALS was significantly reduced with a higher intake of total fat. ORs for the second and third tertile were 0.57 and 0.41 (95% CI 0.21–0.80; trend p=0.008), respectively. For fatty acids, ORs for the highest tertile of intake versus the lowest were 0.30 (95% CI 0.16–0.58; trend p=0.04) for saturated fatty acids (SFAs), 0.35 (95% CI 0.18–0.69; trend p=0.003) for monounsaturated fatty acids (MUFAs), and 0.58 (95% CI 0.40–0.96; trend p=0.044) for polyunsaturated fatty acids (PUFAs). The percentage of total energy to carbohydrate was significantly associated with an increased risk of ALS, while that to total fat was significantly associated with a reduced risk of ALS.

Discussion

In the case-control study of SAH, we found higher intake of carbohydrate, and lower intakes of total fat, SFAs, and MUFAs were significantly associated with an increased ALS risk. To the best of our knowledge, no epidemiological information was available about the relationship between macronutrients and the risk of ALS. This is the first epidemiological finding that a high intake of carbohydrate may be a risk factor for

Table II. Odds ratios (ORs) and 95% confidence intervals (CIs) for ALS by tertiles(T1–T3) of daily nutrient intakes.

	Cut points (g)*		OR (95% CI)‡			
	T1/T2	T2/T3	T1	T2	T3	Trend p
Protein (g)	59.1	81.7	1.00	0.97 (0.56–1.66)	0.77 (0.36–1.65)	0.50
Fat (g)	44.9	65.7	1.00	0.57 (0.34–0.95)	0.41 (0.21–0.80)	0.008
Carbohydrate (g)	230.8	295.4	1.00	1.51 (0.89–2.58)	2.14 (1.05–4.36)	0.042
SFA (g)	12.0	18.6	1.00	0.64 (0.39–1.02)	0.30 (0.16–0.58)	0.038
MUFA (g)	15.4	23.7	1.00	0.71 (0.43–1.17)	0.35 (0.18–0.69)	0.003
PUFA (g)	11.1	15.2	1.00	0.85 (0.51–1.42)	0.58 (0.40–0.96)	0.044
n-3 fatty acids (g)	2.0	2.8	1.00	0.75 (0.46–1.21)	1.14 (0.70–1.87)	0.61
n-6 fatty acids (g)	7.3	10.1	1.00	0.82 (0.51–1.31)	1.24 (0.80–1.92)	0.31
n-6/ n-3	3.5	4.1	1.00	0.75 (0.47–1.21)	1.11 (0.71–1.72)	0.24
Percent of total energy						
Carbohydrates	13.1	15.1	1.00	1.63 (0.96–2.75)	2.90 (1.77–4.76)	0.000
Fat	22.7	28.3	1.00	0.96 (0.62–1.46)	0.39 (0.24–0.66)	0.001
Protein	50.4	57.8	1.00	0.75 (0.48–1.16)	0.68 (0.39–1.05)	0.069

SFA: saturated fatty acids; MUFA: monounsaturated fatty acids; PUFA: polyunsaturated fatty acids. *Adjusted to a mean energy intake of 2122 Kcal/d (8882 KJ/d). ‡Adjusted for age, gender, BMI, and behavior pattern.

ALS, whereas a high intake of total fat, SFA and PUFA may protect against the onset of ALS. We also observed as statistically significant an approximately 60% reduction in ALS risk in the highest category of total fat intake compared with the lowest, and that inverse relationship remained even after adjusting for confounding factors.

A methodological issue in this study was how we used FFQ to assess nutritional status. Since our FFQ used was not designed to examine the amount of selected foods intake, we did not test for the reproducibility of each frequency of consumption of selected foods. Drewnowsk et al. reported that mean frequencies of food consumption were a significant predictor of dietary outcomes (19). Their findings strongly suggest that a misclassification may not be serious enough to produce a spurious positive or inverse association. In this study, we added BMI into the model. Moreover, we added BMI into the model as confounding factor. This was because BMI was significantly higher in cases than in controls, and had a positive association with several nutritional factors, but this was not significant. These findings suggest that BMI may confound for the relationship between nutritional factors and the risk of ALS.

In this study, we have no clear explanation as to the underlying mechanisms for the observation that a higher intake of carbohydrate increases the risk of ALS, while a higher intake of total fat, SFA or PUFA reduces it. For carbohydrate intake, several studies have demonstrated that high glucose promotes apoptotic cell death through the production of free radicals, oxidant stress and reactive oxygen species (20,21). Carbohydrate metabolism was impaired in patients with motor neuron disease and spinocerebellar disease (24), while low glucose affected cell growth and survival (25).

Concerning total fat intake, several experimental studies have demonstrated that total fat and fatty acid type intake such as SFA, MUFA and PUFA has a neuroprotective effect (26–32).

These experimental findings might provide an explanation as to the mechanism underlying the relationship between high carbohydrate and low fat intake and the risk of ALS. Taking these results into account, our findings speculate that the production of oxidative stress induced by a high intake of carbohydrate and the decrease in or lack of an antioxidant defense induced by a low intake of total fat and some kinds of fatty acids may, in combination, increase the risk of ALS. Moreover, our investigations also revealed that a high carbohydrate and low fat intake might play an important role in the development of ALS among humans.

There are several limitations to this study. First, we used prevalent cases where diagnosis was made within four years before the present study, which might cause them some difficulty in recalling their conditions before the onset of ALS. In this study, information on the average habitual intake frequency was self-reported retrospectively in both ALS patients and controls. Patients may have reason to recall or learn about a lifestyle in greater detail than controls. Moreover, since our questionnaire asked for much information appertaining to three years before recruitment into the study, some may have reported dietary habits already altered by the onset of ALS. To avoid such problems, we confirmed no change in their lifestyle during the three years before the onset of symptoms. This was necessary because differential recall and misclassification seemed to be proportional to the length of the period from the onset to the interview. These findings could lead to a misclassification of their true long-term dietary exposure and a weakening of their observed associations.

Secondly, we used a self-administered questionnaire to collect information from both cases and controls. The authors have discovered no significant difference in the responses to questions related to lifestyle factors such as physical activity, general life stress and dietary habit between self- and interviewer-administered questionnaires (33). Marshall et al. reported that 90% of the estimates by spouses and by respondents to food-frequency questionnaires are within one frequency category of each other (34). In our study, associations between macronutrients and ALS occurrence still remained after excluding the data obtained from proxy respondents (data not shown). These findings suggest that the effect of our collection method on subjects' responses would be minimal.

Our current investigation had methodological strengths that were identified according to the most recent diagnostic criteria, and adjustment was made for extensive potential confounders.

In summary, the present study suggests that high intakes of carbohydrate and low intakes of fat may, when combined, increase the risk of ALS. Larger studies with more detailed information are needed to draw a firm conclusion on whether fat intake, including fatty acids, confers protection against ALS in Japan. Further investigations of Western populations are also required to assess the effects of macronutrients on ALS.

References

1. Statistics and Information Department, Ministers Secretariat. Vital statistics of Japan 1995–2005. The Ministry of Health, Labor and Welfare, Tokyo.
2. Strickland D, Smith SA, Dolliff G, Goldman L, Roelofs RI. Physical activity, trauma, and ALS: a case-control study. Acta Neurol Scand. 1996;94:45–50.
3. Longstreth WT, McGuire V, Koepsell TD, Wang Y, van Belle G. Risk of amyotrophic lateral sclerosis and history of physical activity: a population-based case-control study. Arch Neurol. 1998;55:201–6.
4. Veldink JH, Kalmijn S, Groeneveld GJ, Titulaer MJ, Wokke JH, van den Berg LH. Physical activity and the association with sporadic ALS. Neurology. 2005;64:241–5.

5. Gresham LS, Molgaard CA, Golbeck AL, Smith R. Amyotrophic lateral sclerosis and history of skeletal fracture: a case-control study. Neurology. 1987;37:717–9.
6. Deapen DM, Henderson BE. A case-control study of amyotrophic lateral sclerosis. Am J Epidemiol. 1986;123:790–9.
7. McGuire V, Longstreth WT, Nelson LM, Koepsell TD, Checkoway H, Morgan MS, van Belle G. Occupational exposures and amyotrophic lateral sclerosis. A population-based case-control study. Am J Epidemiol. 1997;145: 1076–88.
8. Bergomi M, Vinceti M, Nacci G, Pietrini V, Bratter P, Alber D, et al. Environmental exposure to trace elements and risk of amyotrophic lateral sclerosis: a population-based case-control study. Environ Res. 2002;89:116–23.
9. Longnecker MP, Kamel F, Umbach DM, Munsat TL, Shefner JM, Lansdell LW, et al. Dietary intake of calcium, magnesium and antioxidants in relation to risk of amyotrophic lateral sclerosis. Neuroepidemiology. 2000;19:210–6.
10. Yasui M, Ota K, Yoshida M. Effects of low calcium and magnesium dietary intake on the central nervous system tissues of rats and calcium-magnesium related disorders in the amyotrophic lateral sclerosis focus in the Kii Peninsula of Japan. Magnes Res. 1997;10:39–50.
11. Ascherio A, Weisskopf MG, O'Reilly EJ, Jacobs EJ, McCullough ML, Calle EE, et al. Vitamin E intake and risk of amyotrophic lateral sclerosis. Ann Neurol. 2005;57: 104–10.
12. Galbussera A, Tremolizzo L, Brighina L, Testa D, Lovati R, Ferrarese C, et al. Vitamin E intake and quality of life in amyotrophic lateral sclerosis patients: a follow-up case series study. Neurol Sci. 2006;27:190–3.
13. World Federation of Neurology Research Group on Motor Neuron Diseases: El Escorial Revisited: Revised Criteria for the Diagnosis of Amyotrophic Lateral Sclerosis. A consensus conference held at Airlie House, Warrenton, Virginia April 2–4, 1998.
14. Wakai K, Egami I, Kato K, Lin Y, Kawamura T, Tamakoshi A, et al. A simple food frequency questionnaire for Japanese diet – Part I. Development of the questionnaire, and reproducibility and validity for food groups. J Epidemiol. 1999;9:216–26.
15. Egami I, Wakai K, Kato K, Lin Y, Kawamura T, Tamakoshi A, et al. A simple food frequency questionnaire for Japanese diet – Part II. Development of the questionnaire, and reproducibility and validity for food groups. J Epidemiol. 1999;9:227–34.
16. Drewnowski A, Hann C. Food preferences and reported frequencies of food consumption as predictors of current diet in young women. Am J Clin Nutr. 1999;70:28–36.
17. Friedman M, Rosenman RH. Type A behavior and your heart. New York: Knopf. 1974.
18. Feskens EJ, Bowles CH, Kromhout D. Carbohydrate intake and body mass index in relation to the risk of glucose intolerance in an elderly population. Am J Clin Nutr. 1991;54:136–40.
19. Clapp JF 3rd. Effect of dietary carbohydrate on the glucose and insulin response to mixed caloric intake and exercise in both non-pregnant and pregnant women. Diabetes Care. 1998;21 (Suppl 2):B107–12.
20. Kang BPS, Frencher S, Reddy V, Kessler A, Malhorta A, Meggs LG. High glucose promotes messengial cell apoptosis by oxidant-dependent mechanism. Am J Physiol Renal Physiol. 2003;284:F455–66.
21. Allen DA, Harwood SM, Varagunam M, Raaftery MJ, Yaqoob MM. High glucose-induced oxidative stress causes apoptosis in proximal tubular epithelial cells and is mediated by multiple caspases. The FASEB Journal express doi:10.1096/fj.02-0130fje. Published online March 28, 2003.
22. Allen DA, Yaqoob MM, Harwood SM. Mechanism of high glucose-induced apoptosis and its relationship to diabetic complications. J Nutr Biochem. 2005;16:705–13.
23. Sheu ML, Ho FM, Yang RS, Chao KF, Lin WW, Lin-Shiau SY, et al. High glucose induces human endothelial cell apoptosis through a phosphoinositide 3-kinase-regulated cyclooxygenase-2 pathway. Arterioscler Thromb Vasc Biol. 2005;25:539–45.
24. Murai A, Miyahara T, Tanaka T, Kaneko T, Sako Y, Kameyama M. Abnormalities of lipoprotein and carbohydrate metabolism in degenerative diseases of the nervous system: motor neuron disease and spinocerebellar degeneration. Tohoku J Exp Med. 1983;139:365–76.
25. Russo VC, Kobayashi K, Najdovska S, Baker NL, Werther GA. Neuronal protection from glucose deprivation via modulation of glucose transport and inhibition of apoptosis: a role for the insulin-like growth factor system. Brain Res. 2004;1009:40–53.
26. Luyer MD, Greve JW, Hadfoune M, Jacobs JA, Dejong CH, Buurman WA. Nutritional stimulation of cholecystokinin receptors inhibits inflammation via the vagus nerve. J Exp Med. 2005;202:1023–9.
27. Perez J, Ware MA, Chevalier S, Gougeon R, Bennett GJ, Shir Y. Dietary fat and protein interact in suppressing neuropathic pain-related disorders following a partial sciatic ligation injury in rats. Pain. 2004;111:297–305.
28. Wang ZJ, Li GM, Nie BM, Lu Y, Yin M. Neuroprotective effect of stearic acid against oxidative stress via phosphatidylinositol 3-kinase pathway. Chem Biol Interact. 2006;160: 80–7.
29. Velasco A, Tabernero A, Medina JM. Role of oleic acid as a neurotrophic factor is supported in vivo by the expression of GAP-43 subsequent to the activation of SREBP-1 and the up-regulation of stearoyl-CoA desaturase during post-natal development of the brain. Brain Res. 2003;977:103–11.
30. Fressinaud C, Vallat JM, Rigaud M, Leboutet MJ. Analysis of unsaturated fatty acids of endoneurium and perineurium from normal and degenerating rat sciatic nerve. Morphological correlations. J Neurol Sci. 1987;81:85–92.
31. Bourre JM, Dumont O, Piciotti M, Pascal G, Durand G. Control of brain fatty acids. Ups J Med Sci Supple. 1990;48: 109–31.
32. Beeharry N, Lowe JE, Hernandez AR, Chambers JA, Fucassi F, Cragg PJ, et al. Linoleic acid and antioxidants protect against DNA damage and apoptosis induced by palmitic acid. Mutat Res. 2003;530:27–33.
33. Okamoto K, Ohno Y, Horisawa R, Wakai K, Tamakoshi A, Kawamura T. Agreement between self- and partner-reports obtained by a self-administered questionnaire: medical and lifestyle information. J Epidemiol. 1999;9:183–9.
34. Marshall J, Priore R, Haughey B, Rzepka T, Graham S. Spouse-subject interview and the reliability of diet studies. Am J Epidemiol. 1980;112:675–83.

Statistical Data

Comparison of the Clinical Features of Japanese Patients with Primary Biliary Cirrhosis in 1999 and 2004: Utilization of Clinical Data When Patients Applied to Receive Public Financial Aid

Fumio Sakauchi,[1] Asae Oura,[1] Hirofumi Ohnishi,[1] and Mitsuru Mori.[1]

BACKGROUND: In Asia there are few reports considering time intervals in the examination of clinical features of primary biliary cirrhosis (PBC). Therefore, we tried to compare the characteristics of patients with PBC in two different years.
METHODS: In two fiscal years (1999 and 2004), 9,761 and 13,142 patients with symptomatic PBC were registered to receive public financial aid from the Ministry of Health, Labour and Welfare of Japan, respectively. For the present study, clinical data from 2,127 patients in 1999 and 6,423 ones in 2004 were available. We compared the data in the two different years, including sex, age, major symptoms, and laboratory data.
RESULTS: Male/female ratios were the same figure (0.13 for 1999 and 2004). The median age was significantly older in 2004 than in 1999 (59 years for 1999, 63 years for 2004, respectively, $p<0.01$). Jaundice and esophageal varices were found significantly less frequent in 2004 than in 1999 ($p<0.01$ for each item). Levels of total bilirubin, γ-glutamyl transpeptidase (γ-GTP), total cholesterol, and immunoglobulin M were significantly lower in 2004 than in 1999 ($p< 0.02$ for total bilirubin, and $p<0.01$ for other each item). The positive rate of antimitochondrial antibodies was significantly higher in 1999 than in 2004 (87.0% for 1999, 83.5% for 2004, respectively, $p<0.01$)). Complicated autoimmune diseases such as Sjögren's syndrome, rheumatoid arthritis, and chronic thyroiditis were found significantly more frequent in 2004 than in 1999 ($p<0.01$ for each item).
CONCLUSIONS: Among the patients with PBC in 2004, an increase in median age, and lower levels of laboratory data such as γ-GTP have been found compared to 1999. These results may show an accumulation of patients with better prognosis and the recent medical progress in controlling patients with PBC.
J Epidemiol 2007; 17:210-214.

Key words: Liver Cirrhosis, Biliary; Public Financial Aid; Clinical Findings; Laboratory Findings; Antimitochondrial Antibodies.

Primary biliary cirrhosis (PBC) is a chronic cholestatic disorder characterized by the progressive, nonsuppurative inflammation and destruction of small bile ducts, and the presence of antimitochondrial antibodies (AMA) in the sera. PBC is considered to be associated with disturbances in both cellular and humoral immunity.[1] There are two known clinical types of PBC, i.e, one is asymptomatic PBC which shows no symptoms of hepatic disorder, and the other is symptomatic PBC which has various clinical symptoms and signs, such as pruritus and jaundice.[1,2] In Japan symptomatic PBC was specified as one of "the intractable diseases" from 1990. Patients with symptomatic PBC who want to receive public financial aid for the treatment from the Ministry of Health, Labour and Welfare must sign agreements and write applications. Then they are registered and can receive public

Received April 20, 2007, and accepted August 26, 2007.
This study was supported in part by a grant from the research committee on the epidemiology of intractable diseases of the Ministry of Health, Labour and Welfare of Japan.
[1] Department of Public Health, Sapporo Medical University School of Medicine
Address for correspondence: Fumio Sakauchi, Department of Public Health, Sapporo Medical University School of Medicine, South 1, West 16, Chuo-ku, Sapporo 060-8556, Japan. (e-mail: sakauchi@sapmed.ac.jp)

financial aid. The recognition of patients with symptomatic PBC is conducted by each prefecture.

Although PBC has been described in virtually all parts of the world,[3] most of the epidemiologic data have been derived from Europe,[4,5] and in Asia, and there are few reports considering time intervals in the examination of clinical features of PBC. Previously our cross-sectional study showed clinical futures of Japanese patients with PBC in 1999.[6] In the present study, we tried to compare the characteristics of patients with PBC in two different years by utilization of the clinical data when they applied to receive public financial aid.

METHODS

In the present study, patients whose conditions met one of the criteria below were diagnosed as having PBC following the previous reports in Japan.[7,8]

1. Chronic non-suppurative destructive cholangitis (CNSDC) is histologically observed, and laboratory data do not contradict PBC.
2. AMA is positive. CNSDC is not histologically observed, but histological findings are compatible with PBC.
3. Histological examination is not performed, but AMA is positive, and clinical findings and course indicate PBC.

For the patients with symptomatic PBC, the following information was collected from the records: sex, date of birth, date of diagnosis, estimated onset time, symptoms and physical findings, complicated autoimmune diseases, laboratory data including serum levels of total bilirubin, alkaline phosphatase (ALP), γ -glutamyl transpeptidase (γ -GTP), total cholesterol (T-Chole), immunoglobulin M (IgM), and AMA.

In fiscal year 1999, 9,761 prevalent cases with symptomatic PBC were registered. We could obtain clinical data of 6,527 patients from the Research Committee of Intractable Hepatic Diseases. From 2001, the Ministry of Health, Labour and Welfare started inputting data of patients with intractable diseases collected from prefectures in Japan, and from 2004 electric devices including those clinical data were available. Before 2002, patients with intractable disease applied for financial aid every three years, but after 2003 they have to apply for it every year. In the fiscal year of 2004, 13,142 prevalent cases with symptomatic PBC were registered, and we were permitted to use the clinical data of 6,423 patients provided from the Ministry of Health, Labour and Welfare. Unfortunately, we could not access all of the data from registered patients with PBC in those two years because several prefectures did not provide the data and there were many blank spaces in data regarding resident areas of the patients in 1999. Therefore, 2,127 cases in 1999 and 6,423 cases in 2004 who lived in the same prefecture (32 prefectures) were used to examine for the present study.

We compared symptoms and physical findings, laboratory data, and complicated autoimmune diseases in 1999 and 2004. In the present study, frequencies of items in the clinical data were analyzed, excluding "unclear" or blank spaces. Statistical analysis was performed using SPSS® version 13 (SPSS Inc.). The chi-square test was used for comparing the proportions of two groups, and the Mann-Whitney test was used to evaluate differences in clinical variables. $P < 0.05$ was considered significant.

RESULTS

Sex and Age

Table 1 presents the demographic characteristics of the patients with PBC examined in this study. The male/female ratios were the same figure (0.13 for 1999 and 2004). The median ages of the patients in 1999 and 2004 were 59 and 63 years, respectively. The median age of the patients with PBC was significantly older in 2004 than in 1999 ($p<0.01$). The highest frequencies were in the 60s for the two years (33.2% in 1999 and 33.9% in 2004, respectively). The proportion of the groups aged 20-69 years decreased, while the groups aged 70 years or older increased in 2004 compared to 1999.

Symptoms and Physical Findings

In 1999, pruritis was present in 55.5%, jaundice in 11.8%, and esophageal varices in 21.4% of the patients. While, in 2004, pruritis was present in 57.5%, jaundice in 7.2%, and esophageal varices in 16.5% (Table 2). Statistical significance was not found in the proportion of pruritis, but jaundice and esophageal varices were found significantly less frequently in 2004 than in 1999 ($p<0.01$ for each item).

Laboratory Data

Key laboratory data are summarized in Table 3. Levels of total bilirubin seemed to be almost the same among the patients in 1999 and 2004. We calculated 95 percentiles of the levels of total bilirubin for the two years and found that they were 3.0 mg/dL in 1999 and 2.2mg/dL in 2004, respectively. Regarding levels of ALP, significant difference did not exist between the two years. Whereas levels of γ -GTP, T-Chole, and IgM were significantly lower in 2004 than in 1999 ($p<0.01$ for each item). The positive rate of AMA was significantly higher among the patients in 1999 than in 2004 (87.0% for 1999, 83.5% for 2004, respectively, $p<0.01$).

Complicated Autoimmune Diseases

Complicated autoimmune diseases such as Sjögren's syndrome, rheumatoid arthritis, and chronic thyroiditis were found significantly more frequently in 2004 than in 1999 (17.0%, 7.3%, and 4.7% in 1999, 20.7%, 10.3%, and 12.4% in 2004, respectively, $p<0.01$ for each item) (Table 4).

DISCUSSION

In Western countries, it has been reported that 90% to 95% of patients with PBC are women, with the median age at the time of

Table 1. Demographic characteristics of the patients with primary biiary cirrhosis in 1999 and 2004.

	1999	2004	P value
Number of subjects	n=2,127	n=6,423	
Male/Female ratio	0.13 (250/1,877)	0.13 (753/5,670)	
Age (median, interquartile range)	59 years (51-67)	63 years (55-70)	<0.01*
Age(year) (%)			
-19	2 (0.1)	8 (0.1)	
20-29	10 (0.5)	33 (0.5)	
30-39	58 (2.7)	128 (2.0)	
40-49	322 (15.1)	555 (8.6)	
50-59	692 (32.5)	1,801 (28.0)	
60-69	707 (33.2)	2,175 (33.9)	
70-79	300 (14.1)	1,476 (23.0)	
80+	36 (1.7)	247 (3.8)	
Total	2,127 (100)	6,423 (100)	

*: Mann-Whitney test for 1999 vs. 2004

Table 2. Prevalence of selected symptoms and physical findings among patients with primary biliary cirrhosis in 1999 and 2004.

	1999	2004	P value*
Pruritus	55.5% (1,154/2,080)	57.5% (3,664/6,371)	0.10
Jaundice	11.8% (248/2,094)	7.2% (454/6,348)	<0.01
Esophageal varices	21.4% (397/1,857)	16.5% (1,002/6,072)	<0.01

*: Chi square test for 1999 vs. 2004

Table 3. Laboratory findings of patients with primary biliary cirrhosis in 1999 and 2004.

	1999		2004		
	Median	Interquartile range	Median	Interquartile range	P value*
Total Bilirubin (mg/dL)	0.6 (n=2,127)	0.5 - 1.0	0.7 (n=6,248)	0.5 - 0.9	0.02*
ALP (IU/L)	363 (n=2,108)	241 - 569	360 (n=6,317)	263 - 511	0.72*
γ -GTP (IU/L)	87 (n=2,127)	38 - 198	62 (n=6,328)	31 - 133	<0.01*
Total Cholesterol (mg/dL)	202 (n=2,127)	172 - 231	197 (n=5,860)	171 - 223	<0.01*
IgM (mg/dL)	360 (n=1,690)	221 - 571	242 (n=4,096)	157 - 373	<0.01*
AMA positivity	87.0% (1,761/2,023)		83.5% (3,932/4,710)		<0.01**

*: Mann-Whitney test for 1999 vs. 2004

**: Chi square test for 1999 vs. 2004

AMA: antimitochondrial antibody

Table 4. Prevalence of complicated autoimmune diseases among patients with primary biliary cirrhosis in 1999 and 2004.

Autoimmune diseases	1999	2004	P value*
Sjögren's syndrome	17.0% (310/1,827)	20.7% (895/4,322)	<0.01
Rheumatoid arthritis	7.3% (146/2,005)	10.3% (395/3,822)	<0.01
Chronic thyroiditis	4.7% (99/2,127)	12.4% (487/3,914)	<0.01

*: Chi square test for 1999 vs. 2004

diagnosis in the early 50s.[9-11] In Japan, the Research Committee on the Epidemiology of Intractable Diseases conducted two rounds of nationwide surveys of PBC in 1992 and 1997.[12,13] These surveys reported that the male/female ratio was 0.11 in 1992 and 0.12 in 1997, respectively. The male/females ratios in the present study were 0.13 in 1999 and 2004 so that these ratios were considered to be in approximate agreement with the two reports from the previous nationwide surveys in Japan. The median age of the patients with PBC was significantly older in 2004 than in 1999 (59 years in 1999 and 63 years in 2004, respectively). The main reason regarding this increase of median age was that the proportion of the groups aged 20-69 years decreased but in contrast the groups aged 70 years or older increased in 2004 compared to 1999. One of the explanations of the increase of median age may owe to an accumulation of patients with better prognosis and the recent medical progress in controlling patients with PBC.

Jaundice and esophageal varices were found significantly less frequently in 2004 than in 1999. The decrease of frequencies of jaundice and esophageal varices could be explained by several reasons. It was reported that such severe PBC patients who have levels of bilirubin 2+mg/dL seemed not to survive a long time and their 5-year survival rate was 53% in Japan.[2] Therefore, we tried to compare proportions of patients having levels of bilirubin 2+mg/dL between 1999 and 2004, and could find that the proportion in 1999 was higher than in 2004 (9.0% and 5.9%, respectively). From this result, it is considered that the patients with a high level of bilirubin who often had esophageal varices died within 5 years and the frequency of jaundice in 2004 decreased. It is well known that an elevated bilirubin level is an important prognostic value among the patients with PBC.[3]

Recently, usage of ursodeoxycholic acid (UDCA) is a very common treatment for PBC, and it is known that UDCA lowers the serum level of ALP and γ -GTP, especially among the patients of early stage of PBC.[14-16] In our results, levels of γ -GTP and IgM were significantly lower in 2004 than in 1999, although the level of ALP did not decrease. Usage of UDCA is now common in Japan as well as in western countries; thus UDCA might be effective to lower the level of γ -GTP in the present study. The mechanism of effects of UDCA is still unclear, but it is considered that the drug may have cytoprotective and choleretic effects and alters the bile pool by competition for uptake by ileal bile acid receptors.[3] In the present study, the 95 percentile of the level of total bilirubin was higher in 1999 than in 2004, thus more frequency of patients with high bilirubin level in 1999 was considered a main reason for significant difference between the two years.

The positive rate of AMA was significantly higher among the patients in 1999 than in 2004. Previously, Michieletti et al. described patients with features like PBC in whom serum AMA was negative and antinuclear antibodies were positive,[17] and they suggested a subgroup termed autoimmune cholangitis. AMA is generally examined by the immunofluorescence method (IF) and/or by enzyme-linked immunosorbent assay (ELISA),[18,19] and AMA in the present study was also examined by IF and/or ELISA. Therefore, assessment of the positivity of AMA is thought to be reliable, and it may be possible that AMA negative patients belong to autoimmune cholangitis. We have already reported AMA negative patients with PBC in 1999 among Japanese[20] who showed a lower level of serum IgM. In the present study, the level of IgM was lower in 2004 than in 1999. However, we cannot immediately conclude that the number of the patients with autoimmune cholangitis is gradually increasing because we could not obtain adequate information about histopathology findings in 2004.

Complicated autoimmune diseases such as Sjögren's syndrome, rheumatoid arthritis, and chronic thyroiditis were found significantly more frequent in 2004 than in 1999. In Western countries it is reported that Sjögren's syndrome, rheumatoid arthritis, and thyroid diseases are found in 20%, 10% to 20%, and 10 to 15% of patients with PBC, respectively.[1,10,11] Our AMA negative patients with PBC in 1999 had higher frequencies of complicated autoimmune diseases than AMA positive patients.[20] These higher frequencies of complicated autoimmune diseases may also suggest increases of autoimmune cholangitis

The present study has some limitations. Firstly, we could not access all of the data from registered patients with PBC because several prefectures did not provide the data. Moreover, there were many blank spaces in data regarding resident areas of the patients in 1999, and only 2,127 cases were available. Secondly, we could not completely discuss the AMA negative patients with respect to autoimmune cholangitis because we could not obtain the histological information for all of the patients in 2004. Finally, we compared the cross-sectional clinical features of the patients with PBC in different two years, but comparison of the same patients during some periods is more desirable when we want to know the clinical courses of the patients with PBC. Therefore, we are planning to examine corresponding patients at different points in time.

In conclusion, among the patients with PBC in 2004, an increase in median age, and lower levels of laboratory data such as γ -GTP have been found compared to 1999. These results may show an accumulation of patients with better prognosis and the recent medical progress in controlling patients with PBC.

ACKNOWLEDGMENT

We would like to express our appreciation to the Research Committee on the Epidemiology of Intractable Diseases and the Research Committee of Intractable Hepatic Diseases.

REFERENCES

1. Lindor KD. Primary biliary cirrhosis. In: Feldman M, Scharschmidt BF, and Sleisenger MH, eds. Sleisenger and Fordrant's gastrointestinal and liver disease: pathology/diagnosis/management. 6th ed. Philadelphia: W. B. Saunders Company; 1998:1275-83.

2. Nakano T, Inoue K, Hirohara J, Arita S, Higuchi K, Omata M, et al. Long-term prognosis of primary biliary cirrhosis (PBC) in Japan and analysis of factors of stage progression in asymptomatic PBC (a-PBC). Hepatology Research 2002; 22: 250-60.
3. Lindor KD, Dickson ER. Primary biliary cirrhosis. In: Schiff ER, Sorrel MF, and Maddrey WC, eds. Schiff's diseases of the liver, 8th ed. Philadelphia: Lippincott-Raven Publishers; 1999:679-92.
4. Uibo R, Salupere V. The epidemiology of primary biliary cirrhosis: immunological problems. Hepato-Gastroenterology 1999; 46: 3048-52.
5. Kim WR, Lindor KD, Locke GR 3rd, Therneau TM, Homburger HA, Batts KP, et al. Epidemiology and natural history of primary biliary cirrhosis in a US community. Gastroenterology 2000; 119: 1631-6.
6. Sakauchi F, Mori M, Zeniya M, Toda G. A cross-sectional study of primary biliary cirrhosis in Japan: utilization of clinical data when patients applied to receive public financial aid. J Epidemiol 2005; 15: 24-8.
7. Sasaki H, Inoue K, Higuchi K, Yasuyama T, Koyata H, Kuroki T, et al. Primary biliary cirrhosis in Japan: national survey by the Subcommittee on Autoimmune hepatitis. Gastroenterol Jpn 1985; 20: 476-85.
8. Inoue K, Hirohara J, Nakano T, Seki T, Sasaki H, Higuch K, et al. Prediction of prognosis of primary biliary cirrhosis in Japan. Liver 1995; 15: 70-7.
9. Kaplan MM. Primary biliary cirrhosis. In: Schiff L, and Schiff ER, eds. Diseases of the liver. 7th ed. Philadelphia: J. B. Lippincott Company; 1993:377-410.
10. Sherlock S, Heathcote J. Primary biliary cirrhosis. In: Bircher J, Benhamou JP, McIntyre N, Rizetto M, and Rodés J, eds. Oxford textbook of clinical hepatology. 2nd ed. Oxford University Press; 1999:1089-98.
11. Sherlock S, Dooley J. Primary biliary cirrhosis. In: Diseases of the liver and biliary system. 11th ed. Blackwell Science; 2002:241-53.
12. Shibazaki S, Nagai M, Asou E, Nakamura Y, Yanagawa H, Kawamura T, et al. Survey of patients with intractable diseases. Analyses of patients receiving financial aid for treatment. Jpn J Public Health 1997; 44: 33-46. (in Japanese)
13. Fuchigami H, Nishina M, Shibazaki S, Nagai M, Kawamura T, Ohono Y. Nationwide survey of intractable disease patients. Analyses of patients receiving public financial aid for treatment in fiscal year 1997. Jpn J Public Health 2002; 49: 774-89. (in Japanese)
14. Corpechot C, Poujol-Robert A, Wendum D, Galotte M, Chretien Y, Poupon RE, et al. Biochemical markers of liver fibrosis and lymphocytic piecemeal necrosis in UDCA-treated patients with primary biliary cirrhosis. Liver Int 2004; 24: 187-93.
15. Kaplan MM, Gershwin ME. Primary biliary cirrhosis. N Engl J Med 2005; 353: 1261-73.
16. Shi J, Wu C, Lin Y, Chen YX, Zhu L, Xie Wf. Long-term effects of mid-dose ursodeoxycholic acid in primary biliary cirrhosis: a meta-analysis of randomized controlled trials. Am J Gatroenterol 2006; 101: 1529-38.
17. Michieletti P, Wanless IR, Katz A, Scheuer PJ, Yeaman SJ, Bassendine MF, et al. Antimitochondrial antibody negative primary biliary cirrhosis: a distinct syndrome of autoimmune cholangitis. Gut 1994; 35: 260-5.
18. Kitami N, Komada T, Ishii H, Shimizu H, Adachi H, Yamaguchi Y, et al. Immunological study of anti-M2 in antimitochondrial antibody-negative primary biliary cirrhosis. Intern Med 1995; 34: 496-501.
19. Miyakawa H, Tanaka A, Kikuchi K, Matsushita M, Kitazawa E, Kawaguchi N, et al. Detection of antimitochondrial autoantibodies in immunofluorescent AMA-negative patients with primary biliary cirrhosis using recombinant autoantigens. Hepatology 2001; 34: 243-8.
20. Sakauchi F, Mori M, Zeniya M, Toda G. Antimitochondrial antibody negative primary biliary cirrhosis in Japan: utilization of clinical data when patients applied to receive public financial aid. J Epidemiol 2006; 16: 30-4.